

# Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

試 行 錯 誤

No.59



カンブチアは女たちが支える

## 特集 カンブチアってどんな国

### カンブチアってどんな国

その風土と歴史 — .....	2
トウル・スレンが象徴するもの .....	7
女たちのカンブチア .....	8
カンブチアの思い出 .....	10
ソマリア新難民、生と死のたたかい .....	12
「英語力抜群の王さんがなぜ日本へ？」 .....	14
レストラン探訪 メコン川 .....	16
Dear, My Friend .....	17
JVCNEWS .....	20

# カンブチアってどんな国

カンブチアが今まで世界の耳目を集めたことが2回ありました。アンコール・ワットの発見(?)とクメール・ルージュによる大虐殺の報道です。そして多くの人々が持っているカンブチアの知識もこのわくを越えていません。今回のT/Eはその風土と歴史を追ってみましたので、今までの空白を埋める参考になればと思います。なおこの項を書くにあたり、上智大学外国語学部、石澤良昭教授から助言をいただきました。参考文献に関してはこの号の付録をご覧ください。

## <国名について>

カンブチアという国を地図で捜してもなかなかみつからないかもしれない。ほとんどの地図にはカンボジアという名称で載っている。カンブチアもカンボジアも「カンブジア=Kambuja（『カンブ』から生まれた人たち）」(チャム語碑文)の記載からきているが、19世紀の植民地化の過程でフランス人たちは(CAMBODGE)と呼び、アメリカ人たちは(CAMBODIA)と呼んだ。彼ら自身はポル・ポト政権が自らの国家を「民主カンブチア」と名付け、現在もヘン・サムリン政権は「カンブチア人民共和国」と称している。最近では欧米の新聞でもカンブチア(KAMPUCHEA)と記載されることが多く、JVCも原音に近いカンブチアを使用している。

## 風 土

### <気 候>

典型的な熱帯モンスーン気候で、雨季と乾季に分かれる。気温の変化はほとんどなく、年平均27℃ぐらいである。降水量はシャム湾沿いの海岸地帯で年間4000mm、中央平原で1500mm前後。

### <住 民>

クメール族が人口の87%を占め、ベトナム人(7%)中国人(5%)と他にチャム、コーラー、ポー、クイなどの少数民族がいる。(1980年推定)ほとんどが仏教徒(上座部仏教)だが、チャム族はイスラム教徒である。公用語はクメール語。

### <モンスーンと稲作文化>

メコンはモンスーンのメカニズムに合わせて水量を増減させ、流域やデルタに居住する人々の生活を支配してきた。雨季の氾濫は自然の灌漑となり、乾季には排水され、稲作に適した土壌を作った。氾濫のもたらす沈澱物は自然の肥料源でもあった。農民たちは自然にあわせて土地を利用し、水に頼る簡単な農業が歴史的に定着していた。

## <メコン>

全長4020km、流域面積80万km<sup>2</sup>。世界で10番目の長さを誇り、もちろん東南アジア最大の河川である。

メコンは遠くチベットの山地を源とし、雲南からラオス北を流れ、コーン大瀑布(幅1km、落差15m)へとさしかかる。このコーン大瀑布からメコンの流域は山地から大平原に広がる。そしてプノンペンに至るとトンレ・サップ(大湖)から発した支流、トンレ・サップ川へと合流する。トンレ・サップ湖岸に栄えたアンコール王都は、昔からトンレ・サップ川を通じて河港、プノンペンとつながってきた。メコンはアンコール地域と外国世界をつなぐ自然の大水路でもあった。その後メコンはベトナム南部の穀倉地帯、メコンデルタへと消えてゆく。

## <人々のくらし>

カンブチアには都市と呼ぶにふさわしい街が少ない。この国の全人口の8割までが農村に居住しており、したがってカンブチア社会の実体は農村にあるといえる。農民はニッパヤンで作った高床式家屋に住んでおり、家族は夫婦とその子供たちで構成される核家族が多い。

農家では、子供が生まれるなどの人口増に合わせて周辺の土地を開墾して水田農業を営み、家族生活に必要な十分な収穫を得てきた。一部を除き、カンブチア農民の大部分は自作農で、日常生活における各家族の独立性はきわめて高い。貧富の差はそれほど顕著でなく、農家相互間の独立性が強いため村民同士のつながりはおおむね稀薄である。

こうした村落生活の中心となってきたのは仏教寺院(ワット)である。農村ではワットが祭祀、社交、教育の場として最も重要な社会的役割を担ってきた。そしてカンブチアに限らず、広く東南アジアに信仰されているのは精霊信仰(ナット信仰)である。これは東南アジアの「基層文化」を特徴づける一番大事な要素であるともいえる。精霊は人間の身体ばかりでなく、草、木、虫、魚などあらゆるものに宿り、

## ——その風土と歴史



メコンの犯差

ある時は悪霊となって災いをもたらし、ある時は守護霊となって人々を守ると信じられている。

以上のようにカンブチア人は、自然に調和した形で自給自足的な日常生活を送り、静かで平和的で純朴で信心深い人々、というのが近年まで続いてきた伝統的な農民の姿であった。



### 歴史

#### <東西交易の中継地>

東南アジアは中国とインド貿易の中継地点として紀元前から栄えていた。紀元2世紀末に現在のベトナムのフエ地方に興った林邑(チャンパー)は漢との間に南シナ海交易の覇権をめぐるしばしば抗争し、トンキンデルタへ侵攻した。そのころの海上貿易はかなり広範囲に及び、南方諸国は中国に使節を派遣し、朝貢していた。漢後代の陶器がボルネオ、ジャワ、スマトラなどから発見され、当時の交易の広さを知ることができる。

また、インド人たちがマレー半島の黄金や錫、それに香料を求め、東南アジアの沿岸地方に到来していた。彼らは下ビルマとマレー半島を「黄金の土地(スバルナドゥビッパー)」と呼んでいる。交易の範囲は東南アジア、インドを経て中東、地中海にまで及んでいた。またインド人が通商活動とともに持ちこんだ文化や宗教はしだいに東南アジアの各地域に浸透していき、これらの地域はインド化しながら国家としての形成を整えていった。

#### <扶南の登場>

紀元1世紀ごろメコンデルタ地域に出現した扶南はそのようなインド移民の国だといわれている。中国人の伝える建国伝説によれば、商船に乗ってきた混慎という者が原住民の女王であった柳葉と結婚し、この国の王となったという。扶南は古クメール語のプノム(=山)を中国人が漢字にしたものでプノンペンのプノンと同じ語源である。

扶南は2世紀ごろ発展し、首都はヴィヤダブラ(現在のカンブチア、プレイベン州バ・プノン郡)であった。南部ベトナム沿岸のオケオは森林物産などの集散地として、また西方から到来する物資の集積地として栄え、いく筋もの運河が内陸部と沿岸部を結んでいた。4世紀から5世紀にかけての最盛期にはメナム川流域からマレー半島にまでその勢力を伸ばしている。そのころ扶南は東南アジア諸地域の交易を東西両世界の交易に結びつける役割を果たしていたといえる。このころヒンドゥー教や仏教は支配者階級の宗教として王宮に根をおろしていたが、領域が広がるにつれ支配の正当性を確立するために王が



神がかり的地位を獲得しながら、インド化がさらに一段と進んだ。

古代の東南アジア

#### <扶南から真臘へ>

6世紀になると隋・唐の拡大政策に乗ってその属国である交州(ベトナム北部)の動きが活発になる。交州が海上交易のセンターとして栄えるのに反比例してしだいに扶南は衰えていった。かわりにメコン川中流域にあった真臘(チェンラ)が勢力をつけ、バヴァヴァルマン1世の時には扶南の支配から脱する。真臘はメコン川上流部の産物を扶南や林邑に渡す中継地だったと思われる。この真臘こそはクメール族で、カンブチアの祖先である。

7世紀、イーシャナヴァルマン王は扶南の首都ヴィヤダプラを陥落し、次のバヴァルマン2世の時扶南を完全に滅ぼす。

真臘はインド文化を扶南から引き継いだが、経済的には扶南にない特徴を持っている。そのころカンプチア平原に乾燥地に強いインド米の稲作技術が伝えられ、米の生産は飛躍的に伸びた。真臘が征服した小都市国家もこの米の生産によって支えられていた。これらの首長はクメールの王権の発展拡張とともに中央集権的なピラミッドに組みこまれていく。

イーシャナヴァルマンの死後国内はいくつかに分裂したが、7世紀の半ばごろのジャヤヴァルマン1世の時にはインドシナ半島平原部にその勢力を広げる。ところが王位継承者の内紛から707年に水真臘と陸真臘の南北に分裂する。このころこれらの南半分の海岸に近い地域はジャワ勢力が浸透し支配下にあったものと思われる。

#### <アンコール王朝>

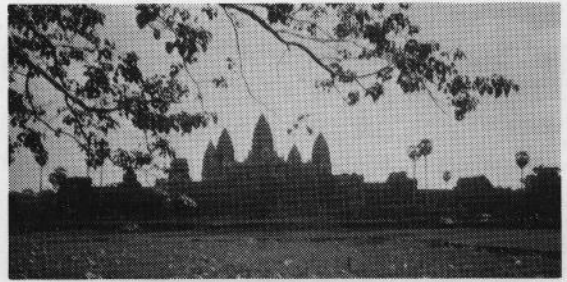
802年再びカンプチアは強力な王のもとに統一された。この王はジャヤヴァルマン2世といい、アンコール王朝の始祖といわれる。彼は東南アジアに新たな王権思想をもたらした。王は「デーヴァ・ラージャ」（神王）の儀をとり行い、自らを神の化身と称し、一体化したのである。「デーヴァ・ラージャ」とは神の王の意味であり、主としてシヴァ神と王とが合体した神像の別名である。王都の中心にはピラミッド型の寺院が作られ、シヴァ神の象徴であるリングが納められた。この神王思想は権力を王に集中させ、後のアンコール・ワットをはじめとする巨大建造物の建設を可能にした。

またアンコールの諸王は巨大寺院とともに大貯水池の建造にも熱心であった。それは9世紀後半のインドラヴァルマン1世のインドラタターカ（インドラの貯水池）に始まる。この広さは東西3.7 km、南北0.7 kmにも及ぶ。大貯水池は大洋にもたとえられ、王権の強大さのシンボルであった。このような貯水池への集水の原理は一般の農村部の灌漑システムに応用され稲作農業を安定させた、といわれている。インドラヴァルマン1世はトンレ・サップの北ハリハララヤに王都を構え、カンプチアの実質的な統一者となった。

次のヤショヴァルマン1世は889年王都をハリハララヤからヤショダプラ（アンコール）に移し、以降550年間アンコール王朝の都城となる。この王

の時その勢力範囲は北はチャオプラヤ中流域まで、南はシャム湾、東はチャンパー、西はチャオプラヤ下流域までと、かつての扶南よりも大きな領域を版図とした。彼の死後政権は一時2つに分裂するが、944年新しい勢力のラージェンドラヴァルマン2世によって統一される。

その後この王権も王位継承の争いが起き、国内は混乱する。



#### <アンコール・ワット>

1010年ごろ国内の混乱を終結させたのはカンプチア東部にいたスーリャヴァルマン1世である。この王は領土をラオスのルアンプラバンからマレー半島の北部にまで広げた。2人の息子が相ついで王になったが国内に反乱が起き、内乱は政権を弱体化させた。以後60年にわたり政権抗争が続く。

1113年スーリャヴァルマン2世は前王朝の後継者たちをその勢力下に治め、この抗争に終止符を打つ。彼はアンコール・ワットの創建者であり、約30年間の治政はクメール族の最盛期であった。宋朝に使節を送り、南海交渉にも乗り出している。

しかしうち続く戦争と大伽藍の造営に国力は衰退し、彼の死後、1177年アンコールはチャンパーに占領される。1181年アンコールを奪取したジャヤヴァルマン7世は1203年再びチャンパを支配した。彼は再び領土を広げ、北はラオスのビエンチャン、西もチャオプラヤデルタから南タイへと、真臘の最後のそして最大の国家を築いた。この王は仏教徒であり、王都のアンコール・トムには大寺院バイヨンが建設され、観音菩薩が祀られた。

王が亡くなるとまた後継者争いが起き、長く続いた。そして再び強力な王は出現せず、彼の死後200年にしてアンコールは廃都となる。かわってタイ系の諸族がメナム盆地から興起し、スコータイ、ランナの諸国の基を築いていく。

#### <アンコールの落日>

12世紀になると小乗仏教が民衆の間に浸透し始め

ていた。やがて強大な王権を支えていたヒンドゥー教や大乘仏教は王権の衰退とともに小乗仏教（上座部仏教）と交代する。12世紀の終わりにはアンコールの王族がセイロンに仏教の修行に行き、それから1世紀後にはクメールの村落にバゴダヤストゥーバが作られていった。

遺跡についてはジャヤヴァルマン7世の死後、見るべきものはない。しかしアンコールは1432年ポニヤー・ヤット王がカンブチア中部のバサンに遷都するまでは王都であった。1282年には蒙古軍の一部が侵入したが、これを撃退させてもいる。1296年この地を訪れた中国人、周達観は『真臘風土記』に、シャムとの戦いで土地が荒廃した東北タイの様子に触れる一方で、カンブチア本土の壮麗な都城や、豊かな産物をも記述している。

— トンレ・サップの増水は稲作に適した沃土を作り、収穫は1年に3回から4回ある。タマネギ、ケシ、ナス、カボチャ、メロン、サトウキビ、タロイモを栽培している。トンレ・サップには多種の魚がいるが、中でも鯉やウナギが多い。…交易には婦人が携わり、若干の唐人も商いをしている。中国からの産物もかなり入っていた—。

### <シャムとベトナム>

13世紀、中国南部にいたタイ族はモンゴルの侵入とともに南下し、チャオプラヤ川流域のクメール民族の帝国体制をくつがえしていた。彼らは1296年ごろまづ上流域にチェンマイ王国を作り、1351年チャオプラヤデルタにはアユタヤ王朝を築いていった。

アユタヤ王朝の開府からクメール人とシャム人の闘いはいっそう激化し、1352年にはついにアンコール王都は陥落する。そして1432年のシャム人のアンコール占領により、ポニヤー・ヤット王はこの地を放棄し、1434年には現在のプノンペンに遷都する。東北タイを失ったクメールにとって、物資の集散地であるアンコールはすでにその存在の意味を失っていた。

一方中国の影響を常に受け、農業律令国家としての形態を整えていたベトナムも15世紀に入ると南下政策をとるようになる。1471年チャンパー（占城）の都ヴィジャヤを占領し、しだいにメコンデルタに入植していく。

このように15世紀以降カンブチアはシャムとベトナムの両者によって少しずつ領土を削り取られていく。もはやクメール王国に昔日の面影はなかった。

しかしこの地から産する物資は相変わらず豊かで、16世紀の終わりごろには交易のため3000人も中国人が居住していたという。このころスペイン人もカンブチアにやってきたが、王位継承に干渉したため追い出されてしまった。代わりに利益を得たのは朱印船貿易で、1635年の鎖国まで続けられた。アンコール・ワットには1632年この地を訪れた森本右近太夫一房の落書が今も残っている。

以後オランダが対カンブチア貿易に乗り出し、商館を置くが、これもカンブチア人の反感を買い、1667年シャムに撤退する。ベトナムがメコンデルタに干渉を始めるのはオランダがカンブチアを見放してからのものである。1674年ベトナムはカンブチア王家の内紛に乗じてサイゴンに兵を進め、カンブチア王家を2分してしまう。以降アユタヤ側とベトナム側にそれぞれの王家は接近し、王家の分裂は恒常化した。その後17世紀末から18世紀にかけてベトナムはメコンデルタを支配下に置くのである。

### <フランスの支配>

ベトナムがメコンデルタの勝者となったころ、シャムもカンブチアでの勢力を広げ、1847年カンブチアはこの両国の宗主権を認めることになる。このころカンブチアはベトナムに併合されようとしていた。1853年アン・ドーン王はナポレオン3世に親書を送り、フランスの保護とタイとベトナムに奪われた諸州の奪還に援助を依頼した。ついにノロドム王は1863年、メコンデルタの新たな支配者フランスと保護条約を結ぶ。

フランス人は17世紀の半ばころからインドシナ半島に来ていたが、宣教師の活動が活発になったのは18世紀になってからである。1836年ベトナムで宣教師が殺害されたことがフランスの侵攻、植民地支配の口実となった。フランスは1862年、ベトナムでのキリスト教布教の自由とともに南部の3省（コーチシナ）を占領し、インドシナ支配の足がためとした。1884年中国はインドシナにおける保護条約を放棄し、1887年ベトナム、ラオス、カンブチアのインドシナ連邦が成立する。フランスとシャムの間では1925年にタイ、カンブチア国境を確認するまで何回か話し合いが持たれた。カンブチアの領土を決定するのはフランスの手に移っていた。

フランスがカンブチアに対して関心を持ち始めた理由には以下のことが考えられる。まず①地理上の位置である。タイとイギリスがベトナムに影響力を

行使するのを抑えるため緩衝地帯が必要だった。②メコン川を利用すれば雲南省に行けるかもしれない。フランスは中国の内陸交易から利益を得ようとした。③反仏闘争をしているゲリラがカンブチア領で保護されている。カンブチアをフランスの支配下に置き、ゲリラの基地をなくす。(これはベトナム戦争が拡大するとともにアメリカがとった措置と同じである)



現在王宮は市民に開放されている。

### ＜民族運動と独立＞

1905年の日露戦争における日本の勝利は、アジア諸国の民族的自覚に最も強く働きかけた。これは独自の文化を守りつつ技術を西欧化することで西欧の支配から脱却することができる証明となった。しかし日本はアジアにとって新たな侵略者でもあった。

1941年12月7日真珠湾を攻撃した日本軍は、3カ月たらずしてフィリピン、マレーシア、オランダ領東インド、そしてビルマを占領し、ヨーロッパ列強の植民地体制を解体してしまった。やがて日本軍による暴力、経済搾取、強制労働などが起き、これらの国には抗日運動が広がっていった。しかし抗日運動は日本が掲げた「アジア人のためのアジア」というスローガンとともに民族運動を成長させることにもなった。

日本軍がインドシナに進駐したころ、インドシナ共産党がグエン・アイ・コック（ホー・チ・ミン）によって組織されていた。1945年日本軍が降伏するとフランスは再びインドシナを支配下に置こうとしたが、このころには民族運動は植民地勢力の復帰に対する戦闘準備はできていた。同年ベトナム独立同盟（ベトミン）はベトナム共和国の独立を宣言した。この独立は連合軍からは承認されず、第1次インド

シナ戦争に引き継がれていく。

またカンブチアにおいても1949年には村レベルにまで人民委員会が作られており、彼らが中核となってレジスタンスグループが作られていた。この年にフランスはシアヌーク国王の要求を受け入れ、カンブチアは主権国家として国連に加盟した。左派グループも彼が国王であり、仏教の長である精神的支柱としての存在を認めた。1953年カンブチアは独立し、翌年のジュネーブ協定で承認される。このころ後のクメール・ルージュの指導者たちはバりに留学していた。

### ＜ボル・ポト派を経て現政権へ＞

独立を勝ちとったシアヌークは1955年王位を退き、国家元首となって「人民社会主義共同体」(サンクム)を組織した。彼は左右両派を巧みにあやつり、外交面でも中立主義をとっていたが、ベトナム情勢が悪化するにつれてこの均衡は破れた。彼は左右両派の舵取りに失敗し、1970年中国外遊中に解任されてしまう(ロン・ノルによるクーデター)。一方中国の文化大革命の影響を受けていた左派(クメール・ルージュ)は1967年には姿を隠していた。

国内は親米政権と解放戦線に2分され、シアヌーク自身は北京で反米、自立独立のための民族統一戦線を樹立する。この中には地下活動をしていた左派勢力も含まれていた。

1973年1月ベトナム和平協定が調印され、8月には米軍は解放軍に対する爆撃を中止した。やがてアメリカの後楯を失った政府軍は1975年4月17日降伏する。かわって実権を握った新政権は1976年、新憲法を公布し国名を「民主カンブチア」とした。シアヌークは国家主席を辞任し、ボル・ポト派といわれる人々が要職についた。彼らは旧政権や軍関係者の多くを処刑し、一般市民を都市から強制退却させ、農村で強制労働を課した。また革命を急ぐあまり、自らの手に負えない者、相容れない者を次つぎに抹殺していった。処刑されなくても餓死、あるいは病死した。その数は数百万人に及ぶという。

各地では反乱は起きていたが、情報が寸断されていたため大きな蜂起にはならなかった。1978年になって東部管区師団長だったヘン・サムリンがベトナムの支援を受けて反旗をひるがえした。1979年1月ボル・ポト政権は崩壊し、カンブチア人民革命評議会が樹立された。国名は「カンブチア人民共和国」と定められた。

## トウル・スレンが 象徴するもの

熊岡路矢

プノンペン市内南部、旧マニウォン通りを少し西に入った所に、ロン・ノル時代までの高等中学校トウル・スワイ・プレイがある。この学校は1975年から3年余り、ボル・ポト時代のS21国家中央治安本部として使用されていた。79年1月7日ボル・ポト政権崩壊の日、収容されていた最後の14名の「政治犯」が殺害され、当局者は逃亡した。その後死者を吊い、調査が行われてから一種の博物館（通称トウル・スレン）となって保存されている。

既に本や記事などでこのトウル・スレン政治犯収容所のことが書かれているが、一度でも訪れた者は一生忘れられない衝撃を受ける。どこの国の歴史にも政治の暗部があるとはいえ、この場所で行われた自白強要の拷問や処刑は私達の想像の範囲を超えている。

収容所の数少ない生き残りの一人に、イエム・チャンという画家がいる。彼は当時の最高指導者の肖像画を描くことを条件に、生きのびることができた。自画像もふくめ彼の絵がたくさん残っている。描かれている事実と彼自身の体験の重みによって彼の絵の一枚は、数千語の言葉より雄弁であると感じる。

この治安本部の当局者達は、大部の調書、強要した「自供書」、逮捕時と処刑時の写真による記録を奇妙なまでの正確さで残している。その克明な資料を整理した結果、最低1万5千人以上がここに収容され「処刑」されたことが明らかになった。これに対して生きのびた「政治犯」は画家イエム・チャンをふくめわずか7、8名である。（昨年9月、プノンペン郊外の重機械整備工場を訪れた時、トウル・スレ

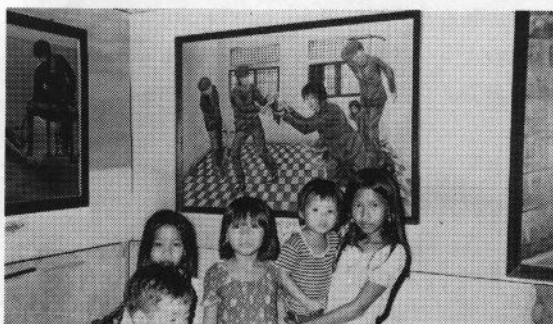
ン生き残りのベテラン技術者に会った。）

トウル・スレン収容所で起きた事は、当時の政権の性格と密接な関係をもっていると考えられるので、非常に気の重い作業ではあるが、背景も含めて考えてみたい。

1975年4月17日のクメール解放戦による革命は、プノンペンもふくめ旧体制（ロン・ノル）支配地区の住民からも歓迎され、同じ国民、民族同士の殺し合いはもうないだろうという楽観的な見通しも強かった。しかし旧体制派の政治家、役人、軍人と見なされた人々は、プノンペンから農村に強制移住させられた後にも摘発されたり、ニセの「協力要請」に応じて、家族ぐるみまとめて抹殺されたりした。旧体制派の中では、過去を隠し通し、密告もうけなかった人だけが辛うじて生き延びた。但し激しい労働、粗末な食事や病気との闘いというもう一つの困難は別にしての話であるが。したがってトウル・スレン収容所で拘留され処刑されたロン・ノル派の幹部は少ない。むしろ1970年以後クメール解放戦線と組んでカンブチア王国民族連合政府を構成した、シアヌーク支持グループの指導者達がまず同一政権内異分子として75年の革命後逮捕されていった。チャン・ユラン人民相、チェアサン司法相など7名の大臣を含むシアヌーク派幹部の「自供書」と処刑が確認されている。

76年4月からはクメール解放戦線主体の民主カンブチア政府が発足したが、発足時点での最高幹部のうち、ウォン・ウェット副首相、フー・ニム情報宣伝相、トイ・プウン公共事業相の3名が77年から78年にかけてトウル・スレンで殺されている。77～78年にはその過酷さの故に、ボル・ポトグループに対する仲間うちの反抗や反乱が企てられ、解放戦線内の将校、兵士の逮捕者も相次いでいる。この他海外からもどってきた留学生、国内少数民族の指導者や外国人も治安活動の対象とされていた。ヨット遊び中、南シナ海岸に漂着した英国青年は逮捕後「12歳の時からCIAのために働いてきた」という「自供」を残し処刑された。

クメール解放戦線、特にボル・ポトグループは、異なる立場や考えをとる者を許容できなかったばかりではなく、それらの人々が変わる可能性についても全く信じていなかった。トウル・スレンは鉄の支配の結論であり、徹底した非寛容政策の象徴である。それでは何故またどのようにしてこのような性格が形成されてきたのだろうか？ —— つづく



壁には拷問イエムさんが描いた絵が掛けられている

# 女たちのカンブチア

松井やよりさん(朝日新聞記者)  
にきく

カンブチアはポル・ポトが政権を握った1975年から1979年の間に、人も物も徹底的に破壊されてしまった。一番ひどい時は成人の男女比が1:2にまでなったという。今は2:3ぐらいに回復してきたが、それにしても圧倒的に女が多い。それも30代から40代にかけての女たちが多く、彼女たちが今のカンブチアを支えているといってもいいすぎではない。

まだポル・ポト時代の傷あとも生々しかった1982年から毎年カンブチアを訪れ、この国の再建を見つめてきた松井やよりさんに、カンブチアの女性たちの暮らしについて伺ってみようと思う。

**□カンブチアにはじめて入った時の印象を聞かせていただけますか。**

始めてカンブチアに行ったのは1982年の3月ですが、人的にも物的にも破壊は予想以上でした。この時は南部と西部しか行きませんでした、あちこちに集団墓地があり、数えきれないほど白骨が散らばっていました。

海岸リゾート地として有名なケップで泳いだ時のこと、あるガソリン・スタンドを通りがかりました。そこはまさに廃墟で、白骨がそのままころがっていました。ほんとにひどい状況でした。

**□それから'83年、'84年と行かれています。それ以降はどんな状況だったのでしょうか。**

次に訪れたのは'83年2月のことです。この時はプノンペンに数日間しかいることができませんでした。建物のいたみは、まだかなりひどいものでしたが、驚いたことに天井はふさがれ、青空天井はほとんどなくなっていました。何もない中、1年間でそこまで復興するのは大変だったと思います。

それから'84年は5月に2週間ほど、東部地方とトンレサップ湖を中心に行きました。その時は反ベトナムのゲリラ活動が盛んで、治安はあまり良くありませんでした。プノンペンのリハビリテーションセンターにも地雷で足をふきとばされた若者たちが大ぜいいました。彼らの多くはポル・ポト時代に孤児



女たちが頭に巻いているのがクロマー。(レンガ工場で)

になり、そしてまた内戦のため足を失ってしまったのです。大国のはざまに犠牲になっているんだなとほんとに胸が痛みました。

**□家庭崩壊してしまった女性たちはどんな暮らしをしているのでしょうか。**

今でも覚えているのですが、シャム湾沿いのカンポットの塩田で働く2000人の労働者全員が女性、しかも若い未亡人でした。成人人口の男女比は1:2ぐらいでしたね。人々は失った人口を回復しようとするかのようにカンブチア中が結婚ブームであり、ベビーブームでした。最近は少し落ちつきましたが、ひところは世界最高の人口増加率だったのです。そのように相手を得られる人は必死で新しい家族を作ろうとしていました。

そのような相手に恵まれない人は自分たちで共同生活などをしています。トンレサップの南のアンコールという所でしたが、自治体の職員をしている女性たちが4~5人で共同生活しているといっていました。女ひとりで暮らしていくのはとても寂しく、同じような境遇の女たちが励ましあって生きているそうです。

**□第2次世界大戦後のソ連のように女性たちがあらゆる分野に進出せざるを得ない状況なのですね。**

そうですね。カンブチアでは牛車が重要な役目を果たしているのですが、この牛車の車輪の溶接や製鉄も女性たちがやっています。

市場でも働いている人の8割は女性です。彼女たちが商業を支えているといってもいいと思います。

**□このような状況になってから女性が働くようになったのですか。それとも昔からですか。**

私は今までいろいろなアジアの国をまわりましたが、おもしろいことにその国の宗教が女性の地位にかなり影響を与えているようです。カンブチアの女性たちは、ほかのヒンズー教やイスラム教を信仰している国々の女性に比べて、抑圧される度合いが少なかったのは事実ですね。ですから昔から男たちとい

っしょに働いていたし、こういう状況になって発揮されたのではないのでしょうか。

**□それではカンブチアの宗教、仏教は現在どのよう  
に位置づけられていますか。**

カンブチアは社会主義国ですから仏教はなくなってしまったかと思っていたのですが、実際は仏教国であることを強調しています。ポル・ポト時代に仏教を抹殺したことの反動から、今は伝統文化である仏教を大切にしようとしているようです。それを政策にしているし、民衆自身が自分たちの信仰を守ろうとしています。壊れかけたパゴダに屋根をかぶせ、お供え物をしている光景も見ました。また生き残ったお坊さんにインタビューをした時のこと、州の共産党の幹部たちがいっせいに頭を床につけおじぎをするのです。とても印象的でした。

**□ベトナムなどから比べると、カンブチアは社会主義国らしくないといえますね。**

そうですね。クメール人はもともと農耕民族で、豊かな自然をバックにしていましたから、きちっとした組織だったことは苦手そうですね。のんびり、ゆったりと自然の中で調和していくのが人々の本来の生き方だったと思います。それでも社会主義国ですから、一定の時間になると革命歌を街中に流すわけです。ところがその革命歌ときたらとてももの悲しくて哀切なメロディーなのです。こんなに穏やかな人々の中からどうしてポル・ポトのような政権ができたのか、今でもナゾですね。

**□ポル・ポト時代の状況から考えて老人たちが多くいるとは思えませんが、現在の彼らの生活はどうか。保障されていますか。また子供たちについてはどうでしょう。**

老人ですか。ほとんど見ませんでしたね。今は野菜の種もないし、家畜も8~9割は死んでしまったし、経済を復興させるのに精いっぱいなのでとてもそこまではいっていないと思います。

そのような中ではむしろ教育にとっても力を入れています。カンブチアではほとんど人材を失っていますから、教育はこの国の将来に重要にかかわっています。現在子供たちの修学率は70%ぐらいですが、これは他の開発途上国に比べてもずいぶんがんばっている数字だと思います。

私が最初にカンブチアを訪れた時にも、壊されたパゴダの一角や掘立て小屋みたいな所で学校が開かれていました。私が感銘を受けたのは、教科書がクメール語で書かれていたことですね。一時はフラン

ス語が使われたこともありましたから。先生なども不足していましたので、字が書ける人はみんな講習を受けて、子供たちに教えていました。

**□タイの難民キャンプでは機織りなどをしていますが、国内ではどうですか。代表的な手工芸などは残っていますか。**

あちこちで花ゴザとかクロマーを織っています。クロマーは絹と木綿があって、木綿のクロマーは手ぬぐいや頭巾になったりして日常生活のあらゆる所で使われています。

手工芸では銀細工はありましたが、タイやラオスのような刺しゅうやパッチワークは見ませんでしたね。母子保健省のアン・サルン女史に会った時のことですが、カンブチアにはおもちゃも何もないので子供たちのために縫いぐるみを作りたい。それが収入の道になればなおいいが、カンブチアには作り方を書いた雑誌も本もない。参考になる日本の本を送ってもらえないだろうかと言われました。私も日本に帰ってから何回か送りました。

**□今年から JVC はカンブチア国内で活動を始めます。国交もありませんし、「なぜベトナムが介入しているヘン・サムリン政権を助けるのか」という人もいます。**

私は苦しんでいる人がいる限り何でもやればいいと思っています。政治的なことを考えたらきりががない。現在困っているのは、ポル・ポト時代の傷あとから立ち直ろうとしている人々なのですから。

私はアメリカのクエーカー教徒のやり方をとても評価しています。彼らは決して一方の側に立たない。人道的な立場から双方を援助しています。ラオスでは旧政権の時にパト・ラオにも援助していたので今でも国の中を自由に歩けるのです。彼らはイデオロギーを越えた人道主義に徹した団体だと非常に信頼されています。やはり民衆の視点に立った援助が必要です。

**□私たちは孤児院の補修とか井戸掘り、自動車修理などをやろうとしています。そのほかにカンブチアの人々が必要としていて私たちにやれそうなことはないのでしょうか。**

母子保健などの医療サービスをやっていただきたいですね。まだまだ医療は手薄です。ベトナムに隣接した所ではベトナム戦争の枯れ葉剤の影響が残っていて、奇型児などの出生率も高いようです。戦争のたびに犠牲になるのは、よくいわれますが、女であり、子供なのですね。

## ◇カンプチアの思い出◇

栗野 美代子

(主婦、元カンプチア)

1965年の夏、はじめてカンプチアを訪れて常夏の国での生活を経験し、人間が人間らしく生きている快(こころよ)さを知り、それからの生き方の大きな節目になったと思っています。天から与えられたものを生活の中にうまく取り入れ、無理のない生活がどんなにその人々を生き生きとさせるかを目のあたりに見た思いがしました。農村で暮らす人々も生活は質素ながら合理的で、手造りの生活の知恵が生きています。年寄りの役割も、水牛や家畜の世話をする子供達も、家族が助け合って暮らしている安らぎがありその暮らし方を見ているこちらも、安心して過ごすことができました。多分、この人達の生活は遠い私達の先祖が行って来たことと同じかと思えます。

### 静かな南の国

朝もやの中に、柄の長い箒で、民家に沿う道筋を掃除している人の姿が見える。ゆっくりとした動作で休みなくからだを動かし、集めた塵を始末すると次の通りへ移っていく。どの道筋も掃除が終わった頃、学校へ急ぐ子供達や勤めに向う人々が道を行き交う。

道幅の広い通りの歩道には、大人の手でふた抱えもありそうな太い幹の樹が枝を張り、緑のトンネルのようになっていた。所々に石のベンチが置いてあり、朝夕の散歩の道すがら、強い日射しを避けてひと休みするのに丁度いいように心くばりされている。比較的車の多い通りの緑地帯には、カンナの赤い花が、ロータリーにはうちわを広げたような「旅人の木」が植えられていた。どこを見ても静かな、そして南国的な雰囲気包まれている。

常夏の国の人々は、朝が早いので、昼食が済むとたっぷりと昼寝をする。商店もシャッターをおろして休んでしまう。時々チキチキと奇妙な音を立てて走るシクロのほかは、物売りの天をつくような声も聞えず、静かな午後のひとときを過ごす。

突然、がたがたと窓をふるわせて強い風が吹いてきたかと思うと、真黒な雲で空は覆われてしまう。稲光りと、空をゆるがすような雷鳴が轟き、そして豪快な雨が降ってくる。すぐ向い側の家も見えない位強い雨。一年の半分位は雨季なのだが、日本の梅

雨のようにしとしと降る雨ではない。傘はいらないというより、さしても全く役に立たない。だからお坊様が日傘を持っている以外は誰も持っていない。雨がやむと子供達は外にとび出して遊びに夢中になる。整った玩具は持っていないくても、いつもの遊び仲間と歓声を上げてはしゃぎまわっている。ビー玉とか、べいごまとか、昔の日本の子供達の遊びと似ている。衣服も決して整っているとはいえないが、一日に三回は水浴びをするというカンプチアの子供達の身体は光って見える。

### シクロに乗って

カンプチアの人達は映画を見るのが楽しみの一つになっている。アメリカのウォルト・ディズニーの所でアニメーションの勉強をしてきた人が帰国してはじめて作った映画を、シアヌーク殿下や皇母様が出席されて披露された。話の内容は簡単なので言葉はわからなくても理解できる。熊の親子が森の中を行ったり、来たりしているだけの場面にも、観客達は大喜びで拍手している。外国で覚えた技術を使ってできた第1作に、こんなにも素直に喜んで観ている人達がいるのかと、すでに雑多なものに埋もれて感動することが少なくなった私たちは、まことに羨ましいという思いで見つめていた。劇場から外へ出ると人々はトンレサップ湖沿いのレストランで夕食をしたり、コーヒーをのんだりして夜の時間を過ごす。そのあと満天の星空の下を、シクロに乗って散策するのは最高の贅沢といえるかもしれない。

シクロは自転車の前輪のところが2輪車でその向いに客が座るようになっている。普通は大人がせいぜい2人しか乗れない位なのに、カンプチアの人達は家族連れで乗りこみ、自転車がつぶれないかと思うこともある。

ゆっくり、ゆっくり、こぎ出すと風が頬を撫でる。空を見上げると、どぉーと音を立てて落ちてきはないかと思われる程近い空に星が輝いている。シクロに乗ったら曲がりたい所で手を右に、左にと出していけばよいので、黙って乗っていてもいつまでも走っている。時々木の枝にさえぎられるので、自分のいる所を確めないと、時も場所も忘れてしまう。



### 人々の暮らし

GさんとEさんは、同じ職場で二人はよいコンビで働いていた。小柄なEさんは言葉が不自由なので普通に会話をする事ができないが、大柄のGさんには理解できた。GさんはEさんの兄のようになり、他の人との関係もうまくとりなしていた。

Eさんは手先が器用で電気関係のことに興味があった。好きなことが幸いして少々の故障なら直すことができた。どうしてそれが解るのか他の人には理解できなかったが、本を読むわけでもないのに半日機械に触っているうちに修繕されていた。新しい機械が入るとEさんは全身で興味を示していた。ある日GさんとEさんが会話にならない言い合いをしているように見えたので、珍らしいことだと思っていたら、あとで説明にGさんがやってきた。カンブチアが将来どうなるか、又どうなったらよいかを話し合っていたという。働いて、家族を養うことができ、子供達を学校へ行かせることができたならそれで充分だと話していたという。

1970年の4月政変があってからは内戦が続き、4年目を過ぎて人々の生活は苦しくなってきた。場所を選ばず飛び込んでくるロケット弾にも慣れ、日に日に小さくなっていくパンの大きさに溜息をつき、マーケットへ買い出しに行っても、商人を脅かし物品を取り上げている兵隊に恐れて買物もできずに帰宅する。そんな毎日であっても、耐えていればいつかは安心して暮らせる日がくると信じて、その日、その日を不自由な中で働きながら待っていた。朝早くから仕事を始める事も変わりはない。

### 強制労働と飢餓

この普通の人達が、内戦が終った1975年の4月以後、言葉にいい表わすことのできない悲惨な目に会った。生き残ることができた友人の話によると、それまでブノンペン市に住んでいた人々は即刻市外へ

出ることを命じられ、ほとんどの人は身のまわりの物も持たずに、老人、子供、病人を問わず強制的に市外に移動させられた。働ける者は農作業につくことを命じられていたが、その時はまだあまり不安な気持ちを持たずに参加していたという。GさんもEさんも馴れない作業に精を出してみたが、約束通りに働いても食料も与えられず、疲労と飢餓で次々に倒れ、家族も命を落としていったという。人の一生がこんなにも無残に切り捨てられていくのを目のあたりに見て、友人は食べられると思う物、草も鼠を走る鼠も捕えて食べ、日中は休みなく働いた。もし無事にこの時期を生きのびることができたら、事実を伝えたいという思いで一日一日を過ごしていた。

大勢の人々が命をかけて作業した農地には、これまで見たこともない位豊かに作物が実っていたというのに、労働に参加した人々には、それに見合うだけの食物の配給もなく、一体どこへ運ばれてしまったのか全くわからなかったという。

内戦が続いていた時(1970~75年)も、その生活のなかに戦争の影が大きく入り込んでいたがカンブチアの人々は、それなりに強く生きていた。ところが1975年4月以後の約4年間は、殆んどの人がこれまでに経験したこともないほど厳しい状況に出会った。そして国の将来に役立つ人々を失ない、カンブチアの民族は滅亡してしまうのではないかと言われもした。

### 再び安らぎの国へ

1979年以降大量のカンブチアの人々が難民となってタイ領に流出してからは、世界中の関心を集めるようになった。またこのことによってカンブチアの国の存在を知る人もあった。そんな事からカンブチアという国を、暗く、哀れな印象を持って見る人も多い。しかし世界に誇れるクメール文化を持ち、何よりも人々が心の豊かさを保ち、大地と共に生きて来た安らぎがある。以前に訪れたことのある誰もが、東洋人、西洋人を問わず、好きになってしまう国なのである。

残念なことに、助ける事ができなかった友人、知人、避難民への薬品の配給を手伝った婦人たち、そして配給を受けていた大勢の人達、この人達の魂を慰める事ができるとすれば、今生き残って国の復興に力を尽くしている人達が、自信を持って各々の幸せをかみしめられる国になるように、少しでもその手助けをさせてもらうことだと思う。

# 生と死のたたかい

檜田秀樹

(ソマリア基礎医療担当)

### 最初の仕事

僕がソマリアのルークに着いたのは1985年2月27日。当時、新難民のマグドール・キャンプにはどこかの援助団体も入っていない、多くの子供、婦人、老人が飢えと病による死の影におびやかされていた。

人々の家はボロ布、紙切れなどをその壁としていたので、雨や風の次の日には必ず病人が出た。キャンプには浄化給水所がなく、人々は川の水をそのまま飲んでた。ルーク地区の他の8つの旧キャンプには行き渡っている食料配給カードを持っている人はほとんどいなかった。人々は少ない食料を近くのキャンプの親戚、知人から分けてもらい食いつないでいた。

この状況打開のため、まず、給食センター作りから始めた。労働者はマグドールの男たち15人。3月は一年で一番暑く、気温は50度にも昇る。そして、仕事は資材運び。単調作業である。すぐにバテるのではないかと思った。しかし、バテるところか、突然1人が歌い始めて、それをきっかけに他の仲間も調子をとって歌い出した。仕事にリズムをつけ、みなで楽しそうに働いている姿は僕にとって新鮮な驚きだった。なぜか嬉しくなり、意外にいい所だな、そう思った。

### 給食センター

3月7日より給食を開始した。当初の対象者は栄養失調児と妊産婦である。スタッフはJVCが3人、RHU(難民厚生局)から派遣された保健員が5人、コック、警備員などはキャンプの中から雇った。以後、一日に12時間前後、時にはそれ以上働かざるを得ない日々がしばらく続いた。

一方、住民側といえば、給食センターに入るのに列は作らないのはおろか、仕事前から何十人もセンターの中に押しかけている有様で、当初は聞き分けのない人々をセンターから追出し、列を作らせるだけで一日のエネルギーの半分以上を消費した。列ができたならできたでヒジが当たった、私が先だ、で女同士でケンカが起きる始末。たまらなく疲れた。

ある日、警備員がセンターで石置きゲームをして

いた男たちを注意したところ、それがなんと乱闘に発展し、町から警官が事情聴取にやってきた。このままじゃあいかんと、翌日キャンプの6人のセクション・リーダー、老人、男たちを相手に話し合いを持った。なぜJVCがここで活動しているのか、なぜ関係のない人間が入ってもらっては困るのか。そんな当り前のことを長々と話し合った。

すると、翌日からJVCの仕事を手伝いに来た男たちがいた。なんと、6人のリーダーたちだった！彼らがJVCの仕事のボランティアをしてくれたのだ。嬉しかった。本当に。彼らは給食の配給、清掃、来訪者の整列(これが一番助かった)などをしてくれ、以後、僕たちの活動にかかせない、大切な住民とのパイプ役を果たしてくれるのだ。

4月中旬よりクリニックもオープンし、活動は波に乗り始めた。しかし、給食の対象者は新たに老人も加えたせいもあるのだが、5月には900人を超し、それがJVCの扱える限界だった。そして、5月下旬に、マグドールⅡと呼ぶことになった1万人前後の人々が同じ地域にやってきた。キャンプの人口は一気に3倍になった。どうしたらいい?!

そしてほぼ同時にコレラが大発生。しかも、RHUにはコレラ用以外の薬品の在庫はほとんどなくなってしまい、緊急以外はクリニックは閉鎖せざるを得なくなった。給食も特定の対象者を除き閉鎖した。(1カ所に大勢を集めるのは危険であったため)

### 子供の生死をにぎる母親

6月は最悪の月だった。次々とマグドールから患者が隔離病棟に運びこまれていく。肺炎、赤痢などの病人がいても薬がほとんどなくどうすることもできない。あの時の気持は忘れようもない。

ここで僕たちのとった行動は、RHUから新たに看護師、保健員を派遣してもらい、スタッフの総力をあげ、1万5000人のキャンプを1軒1軒歩き回り、コレラ患者の早期発見(早期なら助かる)と衛生指導をすることだった。そして、これ以上の汚染を防ぐため、リーダーとの話し合いによって住民自身の手によるトイレ作りを実行に移した。また、他団体も浄化給水所を作ったり、食糧配給カードを住

民に支給した。そして7月上旬、コレラが小康状態になったあとは、状況は一気に好転していった。給食もただ数多くこなすだけでなく、本当に給食を必要とする者に限定して登録をやり直し、一人一人の子供を確実にチェックするようにしたのもよかったと思う。

以後、月を追うごとに栄養失調児は減り、病気にしても一般的なものが目立つようになり、マグドールは落ちつき始めた。落ちついたのは僕たちも同じだったが、そのところで疑問に思い始めていたことは、なぜ同じ栄養失調児でも元気になる子供と死んでいく子供がいるのだろうか、ということだった。

過去1年の間、特に危ない状態にあった4人の子供をJVCの宿舎に引取ったことがある。そこで気づいたのは、もう明日にでも死んでしまいそうな子供たちが食物を与えるだけでどんどん良くなっていくのだ。ではなぜ死んだ子供がいたのだろうか。

こういう母親がいた。まだ、マグドールⅡの給食センターがオープンする前、遠いマグドールⅡからマグドールⅠまで毎日、午前も午後も休まずに2才の女の子を背負って通っていた。女の子は当初、男女の区別もつかぬほどガリガリにやせていた。どの栄養失調児にもあることだが、体は栄養を欲しているにもかかわらず、食欲を全く示さない。食物を口まで運んであげる。しかし、口を開けようとしない。多くの母親はそこであきらめる。

「なぜ、子供に食物を与えない？」

「だってこの子が食べようとしない」

「ちがう、あなたが食べさせなければいけない」

一体、何人の母親とこのやりとりをしただろう。しかし、この母親はあきらめなかった。何十分でも時には一時間でもかけて、わずかコップ一杯分の給食をゆっくりと食べさせていた。長い時間をかけ食べさせる。それは良くなってほしいという、母親の子への思いが表われている。当然の結果ではあるが、この子は徐々に体重を増している。

こういう母親がいた。家はセンターから歩いてわずか5分。彼女も2才の栄養失調の女の子がいたのだが、そんな近くに住んでいても、こちらがけしかけられない限り、子供を連れてこず、連れてきても、子供が食べることに拒否反応を見せると早速、給食をヤカンに入れ、すきのみては帰っていた。残りの給食は誰に食べられるのか。週一回の体重測定で、この子の体重はほとんど増えることがない。

ここで覚えておかねばならぬのは、紹介した2人

の子供はどちらも2才の女の子で、栄養失調に加え下痢、脱水症状と同じ病状であったことだ。ここには明らかにもう「母親」の差が出ている。多くの母親は栄養失調は薬で治ると信じている。ちがう。子供が食べようとしないから太らないと信じている。ちがう。そういう母親を見るたびに僕たちは半分ケンカしながら母親自身の努力を促した。

ソマリアの死生観はあまりにも乾いている。子供が死んだらその時は泣く。しかし、土に埋めたあとはもうその子を思い悼む事はない。全てはアラーの神の思召しなのだ。この観念には初めやりきれないものがあつたが、ソマリアではそれを認める他はない。ただ、どうして、子供を生かすよう努力をしないのか。栄養失調児を宿舎に連れてくると、あるソマリア人スタッフは怒る。

「なんだ、この子は!? どうしてこんなになるまで親はほうっておきたいんだ！」

それは僕の中で今も消えぬ疑問である。

#### 難民移送と今後の問題

緊急状況は秋以降姿を消した。そして、12月13日、当初の予定では3月に開始するはずだった内陸への難民移送が行われた。現在まで3700人が運ばれたが、1月下旬のルーク地区でのコレラ再発生とソマリア北西部での1日1000人もの新難民流入のため、政府、国連はそこに力を注ぎ始めた。難民移送はしばらくは中止され、再開しても早くとも今年いっぱいにはかかると思われる。

今、マグドールで考えねばならないのは緊急を脱したあとの人々を、いかにやる気のある状態しておくかだ。1年前、この人々はたしかにやる気があった。そして、トイレ作り、種を配った時の家庭菜園作りなどで僕たちとかかわり合ってきた。もちろん今でもやる気はある。しかし、何もせず食糧配給だけに頼って生きていくうちに他のキャンプのように、「もらって当たり前」の人々にならないだろうか？僕はあの人々の中に自立していける力のあることを信じている。そういう場を提供してあげることだけが、まさに僕たちのすることである。

どこも援助をしていない時にJVCはこの人々と関わり合い、話し合いながらプロジェクトを推し進めてきた。そして今、お互いの宝物として「信頼関係」がある。今後、人々の自立のためのプロジェクトを行うにしても、うまくいくだろう、という自信はまさにそこから出ているのだ。

# 「英語力抜群の王さんがなぜ日本へ？」

王順来さん (40歳・ラオス)

A.G記

## アメリカ留学経験者に英会話を教える

王順来 (ワン・シュンファ、通称、ぶんらい) さんの英語は、スゴイらしい。らしい、というのは王さんの英語力を計るだけの力が、私にないからである。現在、アメリカに留学したことがあるサラリーマンたちに、英会話を教えているということで、王さんの力が推測できるというもの。

その英語を王さんは、ラオス時代に身につけたという。十代のころからV.O.A (Voice of America) 放送を、分かって分かれなくても聞き続け、英字新聞も読み続けた。高校を卒業してから、2年の“短大期間”には猛烈に勉強して、ケンブリッジ大学の卒業資格も得た。私は、これまた勉強不足でよく知らないが、アメリカ系の卒業資格にくらべて、イギリス系のそれは、至極むずかしいらしい。

学校を卒業後は、エアアメリカに勤め、あるいは自分で貿易会社を経営し、英語力には、さらに磨きがかかった。事業も順調で、日本産の車も持てるぐらいの余裕ができたころ、ラオスの状況が変わってきた。ソ連=ベトナム系の勢力が政権を握り、華僑系の人たちに圧迫を加えはじめたのだ。財産こそ没収されなかったが、企業は国営化され、生活は苦しくなった。王順来さんの奥さんが先生をしていた中国人学校の授業内容も変えさせられた。それまで、中国語で授業し、1日1時間くらいラオス語を教えていたのが、逆になった。王順来さんは、ラオスを捨てる決意をした。

## 先生、日本には行かないでください

ビエンチャンからメコン川を渡り、いくばくかのワイロを払って逃げこんだ、タイの難民キャンプでも、王さん夫婦と3人の子どもを助けたのは、英語力だった。最初に入ったチェンコンでも、来日前のパナニコムでも、王さんは私設の英語学校を開いて収入を得た。「無料で、しかも英語を母国語とする教師が教える学校と競争したんですよ」と王さんは笑う。ラオス語、タイ語が話せるというメリットがあっても、それは十分な能力に裏打ちされていたので

あろう。パナニコムでは、昼はJVCの日本語教育を受けながら、夜は同じ教室を借りて、英語を教えたという。

こんな王さんに、英語学校の学生たちが何人も言った。

「先生、日本に行かないでください。大変ですよ。英語ができて、なかなか仕事ない」

と。そのうえ、王さんの弟はアメリカにいた。留学後、そのまま滞在し市民権を得、貿易会社を営んでいた。

にもかかわらず、王順来さんは日本を選んだ。その理由をこう話している。

「キャンプで1年以上、毎日ラジオを聞いたり、国連のライブラリーに行って新聞を読んで勉強しました。欧米の失業率は非常に高い、逆に日本だけ、あまりないから…。どこに行っても、仕事が第一でしょう。

もうひとつは…。我々は自分の国がないから、華僑だから、兄弟が同じ国じゃなくて、いろんな国に住んだほうが良いと考えました」。

アメリカが華僑にとって住みにくい国になれば日本へ、日本で排外気運が高まればアメリカへ、いつでも、どんなときでも逃げ道を確保しておくというわけだ。

「これも重要なポイントですね、日本に来た」。

なんという逞しさであろう。しかし、「華僑精神だから」といってはならない。王さんのお父さんも好んで華僑になったわけではない。昭和の始め、拡大する日中戦争の戦火を逃れて、北京からビエンチャンにやってきたのだから。

そういえば、日本でもこういうことはあったような気がする。たとえば、関ヶ原の戦いの際、真田家の兄弟が東西に分かれて戦った故事に、どこか似てないだろうか。

## 新しく身につけた印刷技術と英語力で……

さて、周囲の反対を押しきって(?)暮らし始めた日本は、どんな印象を与えたか……。

大和定住促進センターでの半年あまりの研修期間

を終えて、初めて勤めたのは、Fという、バッテリーを作る工場だった。その工場に勤めた最初の日から、1日も早く辞めたいと思ったと言う。

「社長、みなさん、親切でした。でも、なかなか向いてないから。体力だけの仕事ですから…」。

そう感じた王さんは、転職の機会を待った。奥さんと共働きをしながら、少しずつ貯金をする。少しでも家賃を安くするために、神奈川県のある県営住宅に申し込む。住宅の抽選に当たったとき（今回も同行してくれたKMさんによると、県が優先枠を設けたところのこと）、1年半勤めたF社を辞めた。

それから1年、奥さんの収入、貯金、雇用保険、アルバイトなどで食いつなぎながら、職業訓練校に通った。勉強したのは印刷技術、その成績もよかったらしい。英文タイプが得意な王さんは、ワープロローマ字入力が可能で、上達が早かったという。

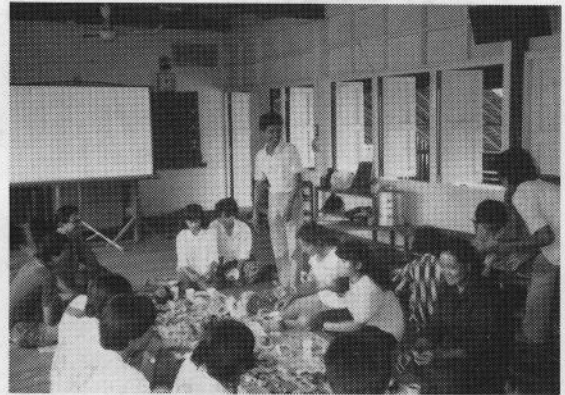
その甲斐あって、この3月末から横浜の印刷会社につとめることになった。さしあたっては、企業の外国向け英文パンフレットの印刷が担当で、翻訳もするのだという。素人目ながら、印刷技術と英語力を兼ね備えた王さんが、得がたい人材だということ分かる。会社でも期待していることだろう。給料も、40歳、大学卒の日本人と比べればよくはないが、まずまずの額は貰えそうだ。自動車の部品工場に難める奥さんを、もっとラクな仕事に替えることもできるだろう。子どもも日本に適応し、成績も悪くない。

現在の悩みは、奥さんのことだという。自らは残業が増えて、あまり家庭のことは見れないだろう。子どもたち（中1、小5、小3）は、家でも日本語ばかり話すから、日本語の苦手な奥さんには、分からない。子どもたちに、家では北京語で話すように言っても、北京語はだんだん忘れていく…。奥さんは淋しく思わないか？ 王さんはそれを心配している。

#### なぜ、彼らは努力を続けられるのだろうか？

定住先の第三国として日本を選んだ王順来さんの選択は、今のところ、大きな間違いではなかったように見える。もちろん、企業という閉鎖的な社会で、どれだけ、精神的、金銭的待遇を得られるか、私自身は、あやぶむところがあるのだが…。

王さんのアイデンティティは、やはり中国人であり、子どもたちにも、そうあってほしいと願っている。文字と文化を中国から輸入した日本での教育は、成長したあと、“故国”の文化を受け入れやすいだ



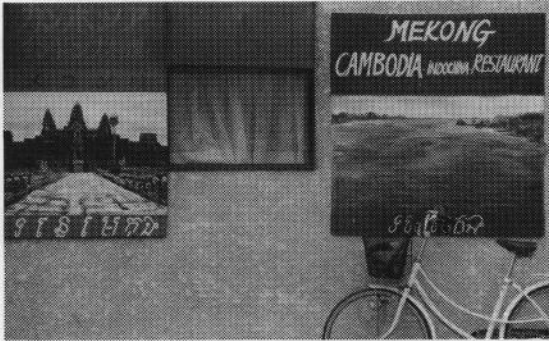
ろう。そういった安心もある。物質的な豊かさに慣れた彼らが、故国で生活できるか、王さん自身も疑問に思っているけれど…。

さて、前回のクットさん、今回の王さん、どちらも、努力の人である。もって生まれた才能、故国での蓄積もあるだろう。しかし、日本に来てからの勉強ぶりにも、目覚ましいものがある。（K.M.さんの言を待つまでもなく、彼らが難民の典型ではない。いや、少数派というほうが正確であろう）。

それにしてもなぜ、彼らの努力は続くのだろうか。持続しない志の持ち主の私は考える。その間に対する2人の答えは同じである。「目的、目標があるから…」と。さらになぜ、彼らだけ目的を持ち続けられるか、と私は考える。この間に対する、今、浮かんだばかりの思いつきを、ここに書きつけることは、危険なことかもしれない。しかし、難民の方に触れ、知っていく過程を共有する、という前回の言葉に従って、書いてみたいと思う。もし、間違っていたら、一笑に付していただきたい。

彼らの努力をさせ続けるバネは、故国での“いい生活”の記憶ではないだろうか。それは、あの生活（精神的、物質的にめぐまれた生活）をもう一度という欲求であり、やればできる、という自分や自分の家族に対する誇りでもあろう。その欲求と誇りが、生きのびるだけの生活に満足することを許さないであろう。

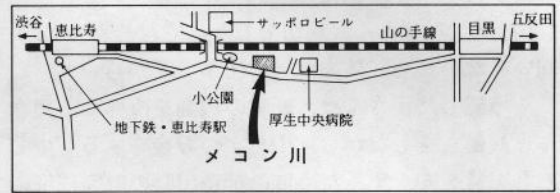
しかし、彼らが“実社会”に出て、彼らの努力が正当に評価されない場面に出会ったら、希望の大きさに比例して深刻な失望を味わったら…。まあ、これは中年にさしかかった私の余計な心配というものだろう…。王さんも次のように言っているのだから。「人間というのは、どの国も同じでしょう。いい人もいれば、悪い人もいる。どの国でも同じです」



山の手線の恵比寿駅と目黒駅の間、どちらからも歩いて7、8分 — 交通の便がいいとはいえないこのインドシナ料理の店に、遠いところでは神戸や京都からお客さんがやってくる。「常連の人は、入れないと困るので必ず電話で予約をして来るんです」と、ご主人の中国系カンブチア人ケイ・フクリュウさん。しかし、オープンした昨年の2月から4カ月くらいは、お客さんが全然入らなかったという。それが夏には待つ人のために店の外にいすを並べるくらいになった。「おいしいものを、できるだけ安い値段で食べてもらいたい」という料理の魅力と共に、カンブチア語、中国語、ベトナム語、フランス語、日本語としゃべれて、すぐに友だちの気分させてしまうご主人の気さくな人柄がその理由では。お客さんはアメリカ人、イギリス人、ドイツ人、スリランカ人、ベトナム人、カンブチア人……と外国人のほうが多いとか。正月と旧正月には、家族がなくて一人寂しい友だちをよんでパーティを開いたそうだ。

ケイさんが日本に来たのは1975年。14歳で台湾に留学して、16歳のとき一時帰国したとき以来、14年間カンブチアの土を踏んでいない。彼もまた、家族のうちお父さん、お母さん、上のお兄さんの消息を知らない。「今、アメリカにいる大おじさんは、以前十何万本のココナツの木を持っていたけれど、あの木はどうなっているのかな……」。カンブチア料理ではよく使われるココナツとバナナで作るデザートの下ごしらえをするミキサの轟音が止んだあと、家族の話聞いた。

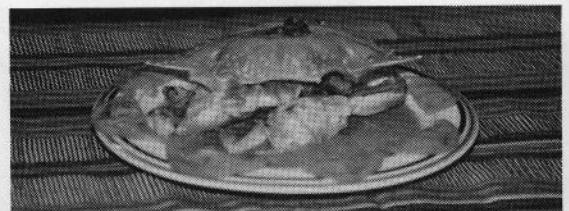
おじさんは、かつてプノンペンで「パゴタ」というレストランを経営。またベトナムと関係した漁業の仕事も行っていて、ケイさんはその環境からベトナム語も上手だ。日本でお店を開きたい、と思ったときカンブチア料理もあり、ベトナム料理も



あるインドシナ料理の店にすることにした。カンブチアの味、クィティオ（米で作った麺。500円。えび入り550円）と、メチャクチャ辛い生牛肉サラダ（850円）といったベトナム料理がメニューに並ぶ。カンブチア料理もベトナム料理も使う調味料は似ている。だんだん日本でも揃えられるようになってきた。毎日の仕込みはご主人の仕事。そして夕方になると、料理担当である奥さん、千恵子さんの出番となる。彼女は昼間は小学校で美術を教えている。店の外壁に描かれた絵も、店内に飾ってある神さまの像も奥さんの作。独特の雰囲気を出している。

「味はいいのだけれど、カンブチアの料理は形がきれいではないので、盛りつけは日本的に美しく」とケイさんは心がけている。青菜、鶏肉、しいたけ、春雨、蓮の実を蓮の葉で包んで蒸した料理(2500円)。さかな、豚ひき肉、しいたけ、高菜のみじん切りを蒸したピリッと辛い具を、生のなすときゅうりと一緒にサニーレタスに包んで食べる蒸し肉(小1700円)も、見た目に食欲をそそり、味も期待に応える。きれいにトマトで縁取られた、香辛料タカイのきいたワタリガニの料理(900円、写真)はこくがあって、汁を残すのがもったいないくらい。これも蓮の葉蒸しもメニューにはのっていない。

「メニューにないのを作ってください」と、常連の人たちは注文してくるとか。何人で、どのくらいの予算で、どんなものを食べたいのか、頼むのがいいそう。このとき人数の多いほうが得。コース(2000円から)で頼むこともできる。(佐久間)



営業時間は午後5時から11時。年中無休。  
東京都目黒区三田1-12-21。電話 03(710)5037

# Dear, My Friend

出会ったこと、思うこと

考えさせられた本、映画……について

原稿、お待ちしております（1000字ぐらい）

## 一人の友人として

菊地早江子

「自分1人の力で難民に何かしてあげよう、などと肩に力を入れないで、また、変な先入観も持たずにまっさらな気持ちで来てほしい」。昨年9月にたまたま帰国していた浜崎妙子さんから、初めてキャンプでボランティアをすることになっていた私へのアドバイスだった。現在、彼女はタイ・パナニコムキャンプで日本語学校のコーディネーター兼教師で唯一のJVC日本人スタッフとして活動している。

きっかけは思いもかけなかった。そのころ、JVCのメンバーとなり1年余りたつ私は日に日に「難民キャンプを見たい、そこで働いてみたい」という気持ちばかりが自分の中で大きくなっていった。だが、海外旅行の経験もなく、ましてや何の技術もない自分に何かできるわけではない。そこで思いついたのは、まず、1人でタイ国内を2週間くらい回ろうということだ。さっそく当時JVCオフィスでタイ担当の高塚氏にコースのことなどを相談に行くと、「10月～11月にかけてラオスの難民が約90人、ラオスの国境近くにあるナポー・キャンプから移動するという情報があるので、人手がいるから、どうせならパナニコムキャンプでボランティアをしてみないか」と言われた。浜崎さんの承諾も得て、私の2カ月間のタイ行きは決まった。

昨年11月9日、私がタイに着いた時にはパナニコムキャンプの日本語学校の生徒達はほとんど大和定住促進センターへ移動した後で残っていたのは20余名、5家族だけだった。

JVC日本語学校の門は毎朝8時に開く。3、4人の難民ワーカーとJVCスタッフが教室と図書館をまず掃除する。授業は午前中に2クラス、午後1クラス（クラスは日本語の能力別に構成）それぞれ1時間、日本語の日常会話を中心に読み書きを学習する。生徒たちは学校が閉まる午後4時半まで暇さえあれば、図書館で会話のテープを開いたり、日本の本を読んだり必死で勉強していた。

私にできることといったら2人の子供の生徒に簡単な単語や歌を教えたり、なるべく図書館に居て、生徒たちの日本や日本語についての質問に答える程度だった。

恥ずかしいことだが、今まで「ボランティアできる豊かさ」を特別意識したことはなかった。しかし、キャンプへ来るために日本で勤めていた会社を辞めて何カ月かを無給で働ける20代の私の存在は、キャンプを1つの職場として見るタイ人スタッフや生徒たちには理解しがたいものだ、彼らと接するうちに感じた。たまたま私は日本に生まれただけであって同時代にラオスやカンブチア人だとしたら立場は逆になっているかもしれない。

そんな意識も手伝って、彼らとは1人の友人としてつきあえたら、という気持ちで接したつもりだ。ただこちらがそう思っても、キャンプでは物理的に「助ける側と助けられる側」という構造は否定できない。

生活の安住を求めて第三国へ定住したいがためにある人は、4年も5年も他のキャンプを転々とし、ようやくたどりついたパナニコムキャンプ。第三国へ出発までの数カ月間は彼らにとって希望と不安の日々だ。難民の中には何故日本に行きたいのかという問いに「同じアジアの国だから」と答える人もいる（浜崎さん談）という。

しかし、日本の国や、人々は彼らの期待に充分に答えることができるだろうか。生活をする、という点では日本に来てからの方がキャンプにいるより大変なのは目に見えている。大和定住促進センターでの3カ月間の日本語学習後は、衣・食・住はすべて自分たちで得なければならないし、しかもアジアに対する理解がまだまだ少ないのが日本の現状だ。

現在、私がパナニコムキャンプにいた時のラオスの生徒は大和定住促進センターにいる。タイで「日本で会えるね」という言葉にとっても嬉しそうに答えた彼らの笑顔、日本で再会したときの瞳の輝きが永遠であってほしい。

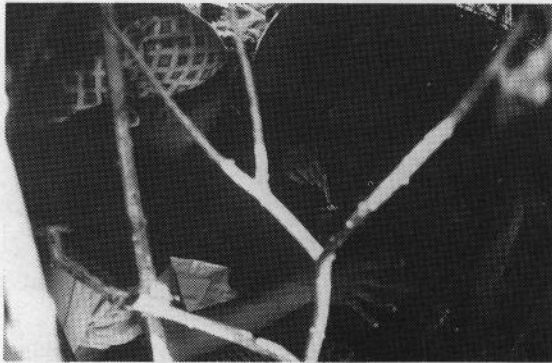
今回のボランティア体験は私にとってほんの出発点にすぎない。難民と私の対等な友人関係はこれからはじまる。

## ソマリア・ルークで

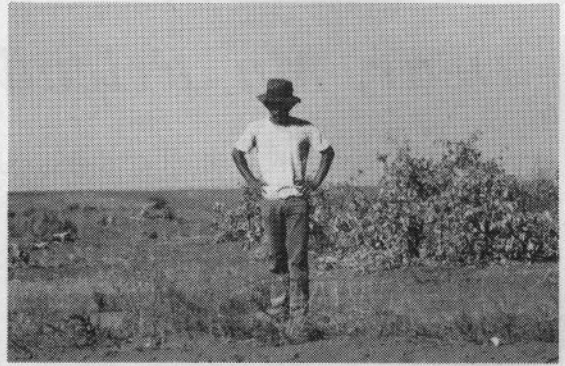
### JVCスタッフをスナップ

佐久間典子

最近の写真週刊誌の猛威について疑問を感じる人でも、JVCプロジェクト表を見て「どんな人が、どんなところで、どんなことをしているのかな？」と素朴な興味を感じることはないでしょうか。ソマリアに行ってきた短期ボランティア、自称 T/E 特派員が撮影した(3月3日現在の)日本人担当者の姿をご紹介します。



山科司さん(写真左)と石井弘代さん(右)(看護婦。マグドール・キャンプでの補助給食と基礎医療を担当) クリニックで診療するほかに、病人のいるアカル(小屋)に行くことも。キャンプまでの悪路を四輪駆動車で往復するのですが、山科さんは「わたしに運転させてくれれば、午後の給食と診療のときに他の人の手を貸してもらわなくてすむのだけれど」。石井さんはマラリアによる40度を超す熱がひいて3日め。「元気印」の女性2人です。



中川正憲さん(養鶏技術者) あの場合に小屋を建て、ヒヨコを育てて農民に分ける— 周りはエサにもなる野草を植える— 料理教室ではどんな卵料理を教えるか……と計画をチェック中? “片手間”で作る料理の腕前から、別名“シェフ・ナカガワ”。



荻ノ迫善六さん(農業技術者) 乾季でジュバ川の水量が少なく、ユニット1の水路用ポンプのところに水が流れて来ないので、木の枝や泥を積んで流れを変えようと……。この川が宿舍脇では彼のフロともなります(立派なシャワーもできたのですが)。

【すすめたいこの1冊】……………小林左樹子

## 『フレデリック——ちょっと かわった のねずみの はなし』

レオ＝レオニ作 谷川俊太郎訳 好学社 1,200円

この絵本をただ単にたわいない子供向けの物語として読むこともできるかもしれませんが。しかし数々の名作を生み出してきた絵本作家レオ＝レオニのこの作品に触れる人の多くは、深く心を揺さぶられることでしょう。

物語の主人公フレデリックは、小さなのねずみ。4匹の仲間といっしょに古い石がきの中に住んでいます。冬の近づいてきたころ、のねずみたちは、とうもろこしや木の実やわらを集め始めました。毎日せっせと働きました。ところが、フレデリックだけは働

かないでじっとしているのです。「フレデリック、どうして きみは はたらかないの?」とみんなにきかれてフレデリックは答えます。「さむくて くらいふゆの ひの ために、ぼくは おひさまの ひかりを あつめてるんだ。」フレデリックはまた、ある日は「いろ」を集め、ある日は「ことば」を集めます。やがて冬になり、雪が降り始めると、5匹ののねずみたちは石がきの中のかくれ家にもります。蓄えておいたたくさんの食物やわらに囲まれて、みんなは楽しくおしゃべりしながら冬を過ごすのですが…。



鶴田三芳さん（プロジェクト・コーディネーター）主に UNHCR やソマリアの機関と折衝するのが2時までの仕事。これは仕事の終わった午後のひとときをジュバ川で水浴び中、対岸にいたソマリア人となぜか友好関係を結ぶというシーンです。



久保裕輔さん（チームリーダー）山口さんに（大丈夫かな）のまなざしを。みんなから“無愛想”といわれるそうですが、“日本語失語症”の説があります。ミーティングでの英語は流れます。



五十嵐裕昌さん、井本勝幸さん、山口博子さん（JASTのメンバー、研修生）モデルファームの一面をJAST用に分けてもらって作業を開始。

そのうちに木の実もわらも減っていき、のねずみたちは石がきの中で寒さに凍え始めます。そしてそのとき、フレデリックは集めておいた「ひかり」や、赤や黄色のきれいな「いろ」、それにすてきな詩—「ことば」をみんなに贈るのです…。

寒くて暗い冬の日のために、「ひかり」と「いろ」と「ことば」を集めるフレデリック。これまで、私たちの生きる社会は、あくせく働いて蓄えることに至上の価値を置いてきました。フレデリックは、今の社会を貫くそうした価値観に対して、アンチテーゼを唱えているとはいえませんか。実際、目の前に見えている利益にのみ気をとられて、大量生産大量消費を追求する一方、非生産的に見えるものを切り捨ててきた現代社会が、どうやら破滅に向かって突き進んでいることを思うと、この物語が、そんな危機

的状況の中にいる私たちに重大なことを訴えかけてくれるような気がしてなりません。私たちは何か大切なことを忘れていやしないかと。確かに、とうもろこしも木の実もわらも必要です。しかし、それさえあれば、人間は本当に幸せに生きていけるのでしょうか。あるいは、そこまで読むのは読みすぎかもしれません。けれども、この作品を読んだとき、私たちの心の中に何か言いようのない暖かいものが広がるのはなぜなのでしょう。それはきっと、この絵本が、私たちが心の中で本当に求めているものを、フレデリックというのねずみを通して見事に表現してくれているからにちがいません。

難民に関心のある方にもない方にもお勧めできる一冊です。また絵本ですから、小さいお子様のある方は親子で読んでみてはいかがでしょうか。

## 3月の動き

### ▶プロジェクト開始に向かって一カンブチア◀

熊岡路矢さんを代表とする「カンブチアの人々への総合的人道援助」プログラムが4月から活動を開始する。カンブチアでは1979年以降の復興の努力にもかかわらず、まだ人々の生活、健康は以前(1968～1969)の水準に達していないという。このプロジェクトでは弱い立場の人々——孤児や未亡人、それから人口の大多数を占める農民——の生活状態の改善と自立を目的に助けしようというものである。

具体的には孤児院の補修と孤児への技術指導、成人向けの技術学校の運営や井戸掘りなどである。孤児は同国内に20万人いるといわれ、その大半が14～19才になり、社会に出る時期にきている。その子供たちに機械技能訓練や手工芸品製作の技術指導をして職業に就くための援助を行う。今、熊岡さんやスタッフは4月末のスタートに向けて、日本国内での広報活動に追われている。

3月6日はJVC事務所でカンブチアの概況とプロジェクトの内容について報告会を行い、8日には新聞各誌に記者発表した。4月4日には大竹財団主催により、日本YWC Aで「カンブチアは今…傷ついた微笑の国」と題して講演会を行うといった具合である。新聞に掲載されることで、より広く国民の理解や賛同の輪を広げるのに大きな力を持つことと思う。各紙とも今までのJVCの活動を評価し、このプロジェクトに期待を寄せている。3月8、9日付の新聞では、「カンボジア難民に対しては、これまで日本の民間団体や政府派遣の医師団がタイ国境で救援してきたが、ヘン・サムリン政権下のカンボジア国内で日本人がボランティア活動に当たるのは初めて。日本とは1975年以来交流が絶たれたままだけに、熱い期待が寄せられている」(毎日新聞)。「タイやアフリカのソマリア難民キャンプで救援活動を続けている日本国際ボランティアセンターが今春からカンボジア国内で孤児援助、技術指導、井戸掘りなどの活動をする……熊岡さんらJVCスタッフは『国外に流出した難民への援助も必要だが、人々が国外脱出しなくてもよいような国づくりに協力することはもっと大切』と語っている」(日本経済新聞)。

「今回のカンボジア救援計画には、一年間で6600万円の予算が必要とされ、JVCでは募金を呼びかけている」(朝日新聞)。

熊岡さんたちはより多くの人々から反響が届くのを期待している。

### ▶新プロジェクト、エチオピア政府と合意に◀

昨年2月から約1年間、エチオピアのアジバール村で行われてきた緊急医療プロジェクトは、一応危機を脱したということで閉鎖された。それに続いて「総合的地域復興プロジェクト」が行われようとしているが、お金や物を出してもらえば後は自分たちでやるという姿勢の強いエチオピア政府側と、お金の使われ方が見えず、人的交流のない援助はできないとするJVCとの間で折り合いがつかず、しばらく調整が続いていた。そこで3月7日、交渉再開とチーム調整のために岩崎代表がエチオピアを訪問した。その結果プロジェクトの規模を少し縮小することでエチオピア政府との間に何とか合意をとりつけることができた。

今回は難交渉だったが、その国の体制、行政機構、民族性や歴史などが違う国でこちらのペースで事を運ぼうとする事はなかなか難しい。現に大筋の合意を得たとはいえ、新プロジェクトの正式の契約には分厚い書類を25～26部も用意し、各ページにサインをもらわなければならない。契約が成立するには2カ月ぐらいかかるだろうといわれている。どのプロジェクトでも“ゆっくりやること”を目指しているJVCだが、現場の進行状態と日本でのキャンペーン活動との間で歯車がかみ合っていない感があっただけに、スタッフの人たちもほっと一安心したところである。

これから日本ではユニセフ協会とJVC 合同キャンペーンが始まり、エチオピアでもマーシャ村での宿舎建設などで忙しくなるだろう。

そのマーシャ村では種蒔きの季節を迎え、すでにメイズやソルガム、テフといった穀物の種を、農業協同組合や村人に配った。6月の大雨期になる前に種を蒔き、根づかせておかななければならない。2月の小雨期に少し土が湿ったところで3月初めから種

## お知らせ

講演会	「カンブチア問題と日本」
講師	栗野 鳳氏 (元カンブチア大使、 JVC 執行委員)
日時	5月21日(水) PM 6:30~8:45
場所	市ヶ谷 YMCA tel 03(264)0661
主催	大竹財団
会費	¥500

蒔きが始まったようである。このプロジェクトが順調に進み、メイズも沢山収穫できるように期待したい。

### ▶ Think Together JVC 上映会で◀

3月29日(土)2時から、神奈川県立厚木青少年会館において上映会が行われた。これは皆で難民問題について考えてみよう、JVCの「始まるまで待てないプロジェクト」が企画したものである。

私たち日本人はブームが去ってしまうと、さも問題が解決したかのように、忘れ去ってしまう特徴を持っているのだろうか。インドシナ難民のブームが去ってすでに久しく、アフリカ救援ブームも下火になっている。しかし危機を生む状況は何一つ解決してはいない。つまり自分たちの日常生活と深く関わっている危機を生み出す構造そのものに対して、私たちはあまりにも無知、無関心ではないだろうか。難民問題をどれだけ日々の生活とリンクさせて考えることができるか、そして正しい理解の後に一体何ができるのかを問うてみようというのがこの上映会の趣旨である。

フィルムはタイのカオイダンキャンプの難民とボランティアの生活を写した「国境を越えた人々」を用意し、合わせて現地から帰った浜野敏子さんの報告を行った。当日は会場周辺のJVC会員や、稲城市の市民グループ「難民と地球の緑を考える会」の会員など10名余りが集まった。そして上映後のディスカッションでは日本の閉鎖性を指摘した意見が多く、日本人が他民族の個性や人権を尊重しながら共存していくことの難しさをほとんどの人が感じていた。この課題に対しては国内、国外を問わずそれぞれの日本人が、外国人と膚で接し合う機会を広げていくしかない、確認しあった。

上映会は今後も続ける予定で、次回は相模原市の宮の上団地で行う計画である。ここの自治会は定住

難民を対象に日本語の学習会をしており、難民と地域住民との交流にいろいろ効果を上げているという。このような経験を皆で分かち合い「難民を考える集い」の核を増やしていけたら素晴らしいと思う。

なお上映会の終了後、参加者は T/E でも紹介された近くのカンブチアレストラン、「アンコール・トム」に立ち寄った。ちょうどそこで送別会を開いていた底抜けに明るいカンブチアの人々といっしょに食事をするようになった。自己紹介をしたり、歌を歌ったりするなど楽しいひとときを過ごした。特に浜野さんはしきりにカンブチアのことを懐しがり、また行きたい、帰りたいを連発することとなった。

### ▶ パントマイムをやりませんか◀

JVCに劇団があるのをご存じだろうか。実は2月12日、団員7名でパントマイムのグループが誕生した。リーダーは加藤明彦さん。以前仕事で滞在したドイツで2年間パントマイムの修行をしてきたのだそうだ。

パントマイムとは、身体のテクニックだけでなく脳味噌の未開の部分(特に右側)をフルに使う演劇である。まだ言葉のない時代の人々が使っていた脳細胞を刺激させて、彼らの感覚を取り戻すことでもある。そのためにわれわれの陳腐な常識や、今まで疑うことのなかった自分の価値観を捨て去って、思いっきり自由に発想することが大切なのだという。そのような積み重ねによって、日常に埋没して狭い視野しか持たなくなった者たちを解放し、言葉を越えたものささえ表現できるようになる。

“劇団JVC”のデビューは4月6日(日)の山の手線チャリティー・ウォーク(詳細は次号)である。団員たちはオリジナリティーあふれるストリートマイム(大道芸?)を繰り広げるのだと意気込んでいる。そして難民定住センターや各種施設を回り、一般公演を行ってからゆくゆくはタイの難民キャンプでの海外公演もと、夢はふくらんでいる。

なお事務所にいらっしゃる方は、何もない所で中腰になり、椅子に座ったふりをして事務をとっているスタッフや、影も形もないカップからコーヒーを飲んでいるボランティアを見てもどうぞ驚かないでいただきたい。彼らは熱心さのあまり、時々仕事でもパントマイムの練習をしているのだから。

とにかく興味のある方は、日曜日の午前中にJVCの事務所をのぞいて下さい。只今劇団員(未経験者歓迎)を大募集中です。

# JVCプロジェクト

1986年3月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行</p> <p>JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時 勉強会———第4月曜日 午後6時～9時</p>	全国社会福祉協議会	<p>岩崎駿介(代表)</p> <p>星野昌子(事務局長)</p> <p>熊岡路矢, 柴田久史 佐々木志保, 荻野美智子 前川昌代, 佐久間典子 古西 勇, 他15人</p>
日本国内	<p>●日本語家庭教師</p> <p>定住難民の家庭を訪問して, 日本語と日本での生活を指導している。現在は3年目の活動の評価を行うためボランティアの募集は休止中。大和市の日本語教室の第4期は3月で終了した。</p> <p>3月10日～14日まで, 東京YMCAの協力で, 大和定住促進センターの難民と定住者が日本語の授業を受けた。機関誌『そんぽっと』を毎月発行している。</p>	<p>(財)アジア福祉教育財団・難民事業本部 神奈川県福祉部 禅林寺</p>	<p>森山久寿子 地区連絡係11人 他約70人</p>
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●農業による自立促進</p> <p>新農場ユニット4, 20haのうち10haの耕起が終わり, 初の収穫をみた。モデルファームでは養蜂, 豆の試験場作り, 植林試験などを行った。農業教室は好評であったが3月で一応終了する。</p>	<p>UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 朝日新聞厚生文化事業団 仏国土をつくろう会 創価学会 ジャパン・タイムズ</p>	<p>税田芳三(ソマリア事務所長), 嶋 紀晶, 山口誠史 久保祐輔, 鍋田三芳 中川正憲, 荻ノ迫善六 柿原建三, 五十嵐裕昌 井本勝幸, 山口博子 J・バークマン, モハメッド, ラシッド, アオキ, アハメッド, シアッド, ソフィア, シェイクアブ ディ, ミーレル 掛村 均, 榎田秀樹 米澤 聡, 石井弘代 中路美和子, 千田悦子 シュクリ, ハッサン, アブディ, フセイン</p>
マグドール・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●補助給食/基礎医療</p> <p>ルーク地区でコレラが発生し, また, ソマリア北西部でエチオピアから新難民が1日1000人の割合で流入しているため, 難民移送は今のところ中止している。補助給食に登録されている子供は現在119人。(1年前は536人であった)。</p>		
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	<p>●医療・保健活動</p> <p>3500人の難民を対象にCHWの協力のもと診療に当たっている。</p> <p>●補助給食</p> <p>建物はすでに完成しているが, 難民の移送が終っていないのでまだ活動は始っていない。難民数が5000人になったら開始する予定。</p> <p>●植林</p> <p>苗木の育成と植林を行っている。 宿舎はワークショップと倉庫を始めに建設が始まった。</p>		
エチオピア	<p>●総合的復興促進</p> <p>3月中旬(3/10～3/18), 岩崎代表がエチオピアを訪問した。3月下旬にはRRCと以後2年間行うことになる復興プロジェクトの契約を結ぶ予定。</p> <p>4月1日から本格的にマーシャ村に入り, プロジェクトを開始する。</p> <p>2月中旬から雨が降り出した(小雨期)ので, 3月初めにマーシャ村周辺の農民へ種を配給した。(小麦—5t, メイズ—2t)</p>	<p>朝日新聞厚生文化事業団 立正佼成会 神奈川県 ユニセフ・エチオピア CRDA BAND-AID 西本願寺</p>	<p>内山田 康, 林 達雄 伊藤達男, 伊藤幸子</p>

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール。季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行	全国社会福祉協議会 一般寄付	中山清秋、ポンピモン・チャイブーン、カモン・ミンムアン、斎藤美香代他約10人
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 自動車、単車、1シリンダーエンジンの整備と溶接の基礎技術訓練を実施している。また上級の授業として、ボランティア団体等の所有する車輛を修理する作業場を設けている。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 妙心寺派宗務所 花園会	常田正行、熊木政江 トンディー・ソムカネ ソムヨット・ラタナタム
国境のサイト2、 ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食 緊張が続いているが、まだ昨年のような直接的な攻撃はない。UNBROは、現在サイト2よりタイ国内に近いサイト3を避難地として用意している。現在受益者は、3歳以下3741人、妊婦1034人、結核患者207人、ハンセン氏病患者27人となっている。	WFP/UNBRO	テリース、マーシャ、ブーム、トンチャイ、 蓮尾慶治、仲田奈々子 ソムボン、スピチャ エンドリアン、ソムサック スリベン
パナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ●日本定住予定者 ①日本語学習の基礎（読み、書き、聞き取り） ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ●他国への定住予定者（イギリス、ドイツ、スイス、スカンディナヴィア他） ①日本へ行くまでの手続き等の理解を深める	天理教千葉	浜崎妙子 ティアン・パントゥー 同前知子 (3月14日終了)
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 スラム地区定住児童が小学校を卒業できるよう学費を援助している。来年度の対象者は250人。 ●クロントイ図書館 1～12区周辺の居住者、学齢未満の児童、小学校を中退した児童、青少年を対象にしている。 ●移動図書 10のスラム地区に子供向け図書を中心に貸し出している。少なくとも対象者は約2000家族になる。 ●移動学習センター 9のスラム地区で学習の機会のない子供たちのために人形劇などで教育を行っている。 ●再定住援助 スラムを立ち退かされる人達がラック・バーン地区に再定住し、新しい生活共同体を作るため支援する。	モラロジーMIRC NTV、JOFIC 庭野平和財団 YMCA横浜 聖ヨゼフ老人ホーム	ヴェラナット・チュンクル サムルエイ・ジョンヨークラン アルニー・プロマ ウティバン・ラタナタリー 佐藤正喜、
カンブチア (ブノンペン)	●カンブチアの人々への総合的人道援助 ①孤児院の老朽化した宿舎の補修、②OXFAMとの共同による井戸掘り、③救援のためのワークショップ/技術学校等の援助計画を立案した。	(協力団体) ユニセフ・ブノンペン事務所	熊岡路矢、簗田健一
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (パターン・プロセッシング・センター)	●国際移民委員会(ICM)－第三国定住手続きにともなう医療業務	城西病院	青井千恵

## JVCの活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶**JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円  
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶**機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

①会員:東京5-48365 加入者名-JVC会員係

②T/E:東京3-54186 加入者名-JVC東京事務所

(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (3月小計 189,031円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. インドシナ難民救援募金 (3月小計 0円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. カンプチア募金 (3月小計 620,428円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- D. クロントイ・スラム募金 (3月小計 0円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- E. テッグ・スラム奨学金・基金(3月小計 169,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- F. 日本語家庭教師募金 (3月小計 0円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- G. 医療募金 (3月小計 0円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- H. ボランティア募金 (3月小計 0円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- I. JVC運営経費募金 (3月小計 0円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. 無指定募金 (3月小計 307,600円)

▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)

加入者名-JVC東京事務所

## 編集後記

▶アンコール・ワットには砲弾の跡が痛々しい女神像がいくつもある。中には顔が欠けてしまったものまである。ここはロン・ノル軍と波尔・ポト軍の戦場であった上に、宗教を否定したクメール・ルージュにとっては過去の遺物でしかなかった。民族文化の誇り、独立のシンボルも新しい時代の創造という名のもとに否定された。確かにこれらの建造物はたった一人の権力者のために多くの奴隷が働かされて作ったものではある。クメール・ルージュは階級なき社会をめざし、すべての人を奴隷にしてしまった。アンコール・ワットを作った王と違っていたことは、彼らは荒れ果てた国土以外には何も残さなかったということである。



昭和61年4月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC東京事務所)

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 Telex:2323187 JVCHQ J

バンコク事務所 JVC THAILAND

67 South Sathorn Road

Bangkok, THAILAND

☎(286)4857

Telex:87032 COMSERV TH

ソマリア事務所 JVC SOMALIA

c/o UNHCR P.O. Box 2925

Mogadish, SOMALIA

Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア事務所 JVC ETHIOPIA

c/o Embassy of Japan P.O.Box

5650 Addis Ababa, ETHIOPIA

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

\*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円